

倫理研究所第二代理事長の丸山竹秋は、著書『新経営倫理学―地球的視野に立って―』の中で、経営の「眼目」について述べています。

眼目とは、物事の中で最も重要で肝心な部分を示す語であり、要点、あるいは主眼を意味します。では、経営における最も重要で肝心な点、すなわち大眼目とは何でしょうか。著書では、それを「地球の安泰」を図ることであると指し示しています。

安泰とは、安らかで無事な状態を指し、危険や心配事がなく、物事が穏やかで落ち着いた状況が続いていることを意味します。しかし現代の企業活動では、安泰よりも繁栄を追い求めがちです。繁栄とは、豊かに栄え、勢いが盛んになって発展する状態をいいます。ところが、この繁栄のみを眼目とすると、様々な摩擦が生じ、他との調和が保てなくなることがあります。その結果、生態系や自然環境を破壊することにもつながりかねません。

実際、一九五〇年代半ばから一九七〇年代前半にかけての日本、いわゆる高度経済成長期には、日本経済は年平均約10%の成長を遂げ、国民生活の水準も大きく向上しました。いわゆる三種の神器と呼ばれる冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビが普及し、日常生活が大きく変化した時代でもあります。

その後、東京オリンピックの開催によって日本経済はさらに繁栄を極めていきます。また、新・三種の神器としてカラーテレビ、クーラー、カー（自動車）が普及し、日本



地球安泰を使命とする 企業経営の新たな挑戦

人の生活は一段と豊かになっていきました。ところがその反面、急速な工業化と都市化が進んだ結果、河川・大気・海岸線における環境汚染や自然破壊は著しいものとなりました。公害も深刻化し水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく等、住民に甚大な健康被害をもたらされたことも事実です。このように、繁栄の追求に偏り、行き過ぎた発展を求め続ければ、私たちの生命を危機にさらす事態を招きかねません。

では、安泰だけを求めればよいのでしょうか。安らかで無事な状態だけを祈る経営では、前進どころか後退を招く恐れがあります。時には危険を承知で仕事をやり抜く気概がなければ、成長も発展も望めないのも事実です。重要なのは、危険を冒してでも仕事をやり切る行動の中で、最終的には安泰を目指すという視点を持たなければ、意味を成さないという点なのです。

自分さえ儲かればよい、我が社さえ発展すればよいという自己中心的な経営がまかり通れば、再び種々の問題が噴出し、社会全体が危機に陥ることでしょう。

しかし、これまでの過ちの歴史から、私たちは多くの教訓を得ているはずで、エゴに基づく経営を捨て去り、世の中をより良くすることを志す倫理経営が浸透していけば、私たちの生活は真に豊かになっていくに違いありません。そして、経営の大眼目である「地球の安泰」を目指す企業が、社でも多く誕生すれば、より良い社会が着実に築かれていくはずで、